

埼玉県立文書館  
令和3年度企画展

# 古物を伝える

— 好古家たちの埼玉 —



埼玉県マスコット  
「コバトン」

こころ、咲いたまま。



彩の国  
埼玉県



さいたまけんりつもんじょかん  
埼玉県立文書館  
Saitama Prefectural Archives

## 開催にあたって

埼玉県立文書館は、昭和44年(1969)に全国4番目の文書館として開館しました。これまで、埼玉県の史料編さんとして『埼玉県史料叢書』を編さんしてまいりました。令和3年度は第24巻「小室家文書三 五代小室元長日記」を刊行します。

小室家は、江戸時代から比企郡番匠村(現ときがわ町)の産科医として、代々地域医療に貢献した家でしたが、同時に五代元長は古物を収集し、研究をした「好古家」として有名です。

本展は、第24巻史料叢書「小室家文書」発刊を機に、元長をはじめ、埼玉県で活躍した好古家たちに焦点を当て、古物を「集める」、「調べる」、「伝える」の三つのテーマを立てて、好古家たちが「遺したモノ」と、古物に込めた「想い」を御紹介します。

令和元年(2019)冬以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が世界中の人々の命と生活を脅かしています。私たちは多くの試練を経験していますが、同時に、「一番大事にしなければならないことは何か」という命題を突き付けられているのかもしれない。

古人が大事にしてきたことを「モノ」に込め、さらに好古家たちがそれらの「モノ」を集め、調べ、伝えたかったことが皆様に何らかのメッセージを送っているのではないかと存じます。

「温故而知新 可以為師人矣」と論語にあるように、本企画展を通じて、私たち現代人が学ぶモノを見出せる機会となれば幸いです。

令和3年12月14日 埼玉県立文書館長

埼玉県立文書館令和3年度企画展

### 古物を伝えるメッセージ —好古家たちの埼玉—こうこか

主催 埼玉県立文書館

会場 埼玉県立文書館 展示室

会期 令和3年(2021)12月14日(火)

～令和4年(2022)2月13日(日)

### 凡例

- 本書は、埼玉県立文書館令和3年度企画展「古物を伝える—好古家たちの埼玉—」の展示解説図録である。ただし、紙幅の都合により掲載していない資料もある。
- 図録の掲載順と展示の順番とは必ずしも一致しない場合がある。
- 掲載資料には、資料名称、年代(年代推定のものには[ ])を付した、文書番号を付した。所蔵機関の記載がないものは、すべて埼玉県立文書館の収蔵である。
- 本書への掲載にあたり、収蔵文書目録掲載の資料名称を適宜改めた場合がある。
- 写真は文書館職員が撮影したものである。なお写真の縮尺は同一ではない。
- 本展の企画・図録の執筆・編集は史料編さん担当学芸員駒見敬祐が担当した。このうち「コラム:武蔵武士「畠山重忠」と好古家」は史料編さん担当学芸員沖山愛海が担当・執筆した。

### 主要参考文献

- 新井浩文「小室家文書所収の中世文書—『工村々舎叢書』所収「内山氏古文書写」について—」『文書館紀要』11、1998年
- 塩野博「『石剣考』と井上淑蔭の考古学」『國學院大學考古学資料館紀要』19、2003年
- 塩野博『埼玉の古墳[比企・秩父]』さきたま出版会、2004年

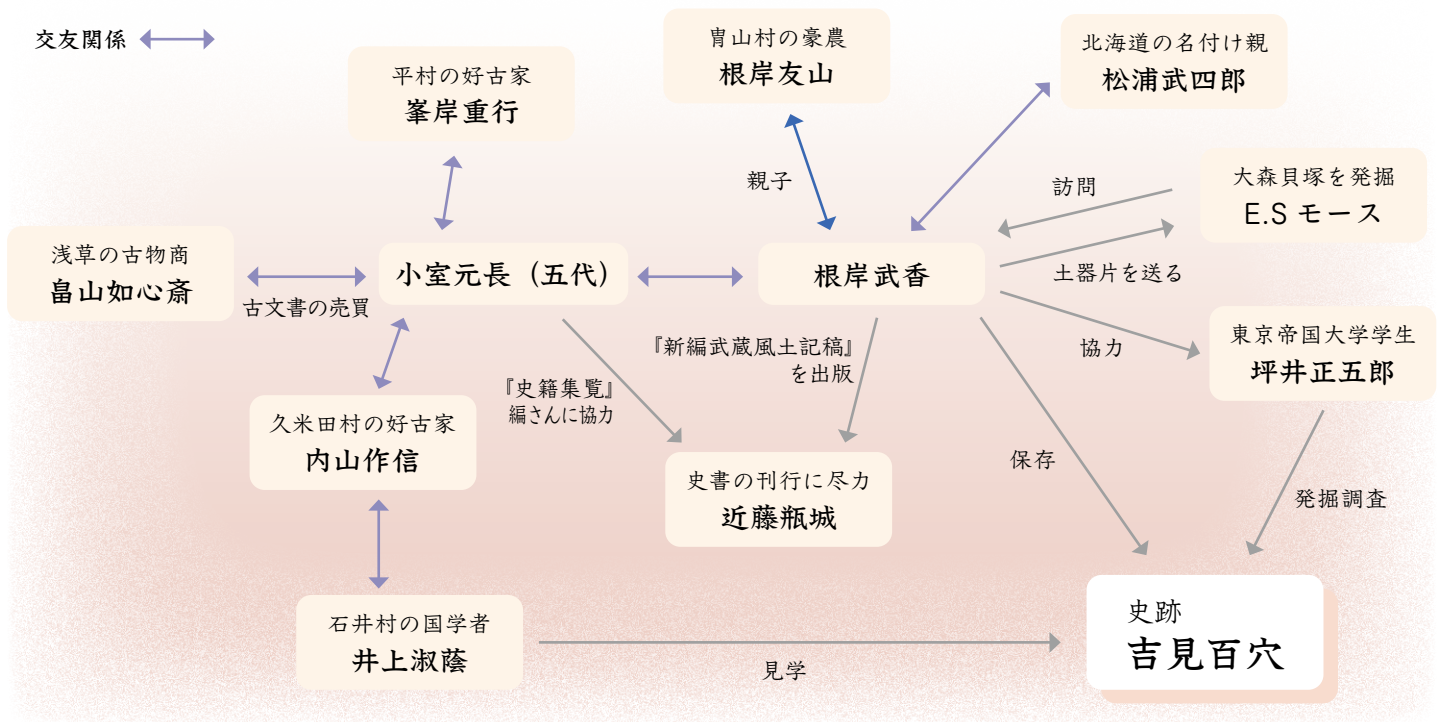
- 重田正夫「比企郡都幾川村小室家文書調査概報」『文書館報』7、1979年
- 重田正夫「幕末・明治初期「好古家」たちのネットワーク」『埼玉の文化財』51、2011年
- 重田正夫・白井哲哉編『『新編武蔵国風土記稿』を読む』さきたま出版会、2015年
- 鈴木廣之『好古家たちの19世紀 幕末明治における〈物〉のアルケオロジー』吉川弘文館、2003年
- 根岸友山・武香顕彰会『根岸友山・武香の軌跡—幕末維新から明治へ』さきたま出版会、2006年
- 芳賀明子「「好古家」の書簡集『内山手簡』—内山作信と小室元長との交流—」『文書館紀要』25、2012年
- 芳賀明子「書簡にみる好古家畠山如心齋と小室元長の交流—明治十年代の古文書販売と新井白石の墓所調査をめぐって—」『文書館紀要』31、2018年
- 平野恵「好古から考古へ—近世から近代へ継承された学問の形態—」『Ouroboros』26、2005年
- 古畑侑亮「幕末・明治における「好古家」の随筆受容:武蔵国の在村医小室元長の場合」『書物・出版と社会変容』20、2016
- 三浦泰之「武蔵国の「好古家」根岸武香と松浦武四郎」『松浦武四郎研究序説—幕末維新时期における知識人ネットワークの諸相』北海道出版企画センター、2011年
- 水口由紀子「根岸武香と利仁神社経塚」『埼玉県史跡の博物館紀要』9、2016年
- 『調査研究報告4 E・S・モース関連史料と根岸家 根岸家におけるE・S・モース関連史料と学術的交流に関する考察』熊谷市文化遺産保存事業実行委員会・文化遺産研究会、2016年
- 『大里村史 通史編』大里村、1991年
- 『特別号 郷土の偉人根岸友山とその子武香』大里歴史研究会、2005年

## プロローグ 古物を伝えた人々

江戸時代後期から明治時代にかけて、古物に関心を寄せ、それらを収集したり、研究したりすることに力を入れた「好古家」と呼ばれる人々がいました。好古家たちが収集・研究した成果は現代にも伝わり、地域研究の基盤の一つとなっています。明治10年(1877)に来日したアメリカの動物学者で、大森貝塚を発掘したことで知られるエドワード・S・モースは、大森貝塚の報告書『大森介墟古物編』の緒言のなかで「日本ニハ好古家ノ数、或ハ他国ヨリ多カラン」(好古家は原文では“gentlemen interested in archaeology”。翻訳は矢田部良吉)と述べています。自らも日本で古物収集を行っていたモースが、日本における好古家の多さに素直に驚いた所感と言えます。

埼玉県では、比企郡番匠村(現ときがわ町)の小室元長(五代)や、大里郡青山村(現熊谷市)の根岸武香など、多くの好古家が現れました。

### 本書に登場する好古家交友関係略図～小室元長(五代)・根岸武香を中心に～



#### だじょうかんちょう 太政官牒

小室家文書 5695 永久5年(1117)2月20日

比企郡番匠村(現ときがわ町)の医家、小室家に伝わった永久5年(1117)の太政官牒です。太政官牒とは、古代律令官制における太政官から、直接の管轄外へ出された公式様古文書の一つです。内容は僧侶の任命に関するものとみられますが、欠損部分が多くどこにあてられたものかなど詳しいことは不明です。

一見すると埼玉県の歴史や伝わってきた家には関係の無い資料ですが、これらは好古家の収集によって、伝えられてきたものです。この太政官牒は、小室家文書の中に残されていたもので、好古家としても知られる小室元長が収集した古文書のひとつです。

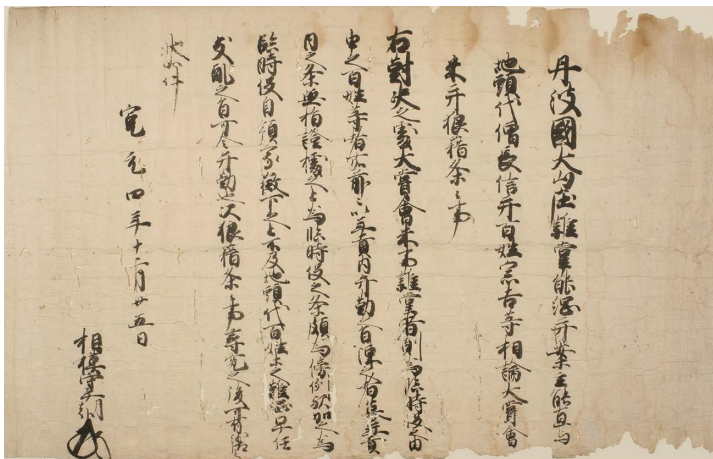
# I 集める ~ 収集 ~

好古家の収集対象は、古文書や考古遺物、古碑の碑文など多岐にわたりました。とりわけ中世の古文書は好古家たちのコレクションの対象ともなり、好古家同士でのやりとり・コミュニティを通じて集められていました。

また、好古家の収集の関心は、自身の出自に係わるものや、地域の歴史に関するものにも向けられていました。そうして集められたり、写されたりした古文書等は、今では地域の歴史を研究する上で大切な史料となっています。

## I - 1 収集された古文書

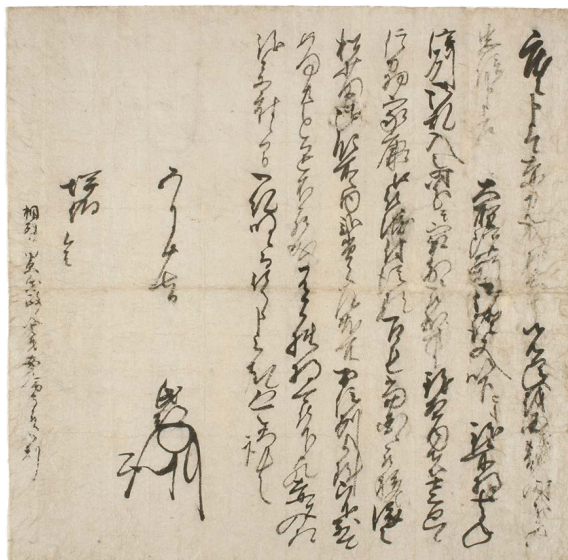
好古家たちが収集した古文書は、必ずしも地域の歴史に直接的には関わりのあるものではないコレクションとしてのものや、地域の歴史研究のために積極的に書写されたものなど、集められた経緯は様々です。好古家同士で交わした書簡からは、古文書の売買などに関する記述もあります。



### ろくはらみぎょうしよ 六波羅御教書

小室家文書 5696 寛元 4 年 (1246) 12 月 25 日

丹波国大山荘（現兵庫県丹波篠山市）における大嘗会米の狼藉に関する相論に対して、鎌倉幕府の六波羅探題北条重時が下した裁許状です。もともとは東寺（京都市南区）に伝わった「東寺百合文書」のうちの一つと考えられるものですが、明治時代までに流出し、それを小室元長が購入して現在に伝わったものです。



### ほうじょうじくにしよじょう 北条氏邦書状

小室家文書 5700 [天正 11 年 (1583) ] 5 月 17 日

北条氏邦は、戦国大名北条氏の 3 代目当主北条氏康の子息で、鉢形城（寄居町）主として北条氏の領国支配を支えた武将です。この書状は、越後国での戦いにおいて忠節を尽くした赤見入道の戦功を伝え、所領を与えるよう、当主へとりなしたものです。

### こむろげんちやう 埼玉の好古家① 小室元長(五代) (1822 ~ 1885)

小室家は、比企郡番匠村（現ときがわ町）の産科医として、地域医療に貢献した家です。元長は医師小室家の五代目にあたります。祖父である三代元長から熱心に医術の教育を受け、自身も父四代元貞から家督を継承し、医業に従事しました。また、幕末期には番匠村の名主後見役を務めるなど、村政にも尽くしました。

明治 8 年 (1875) に隠居して家督を子息六代元貞に譲った五代元長は、古文書や古記録の収集を積極的に行い、それらを綴った編さん物も多く残しました。

※小室家は初代元貞、三代元長、四代元貞、五代元長、六代元貞と、各世代で同じ名前を名乗ることが多いため、元長(五代)と記しています。以下、元長といった場合は五代のことを指します。



### はたけやましゅかん 畠山手簡

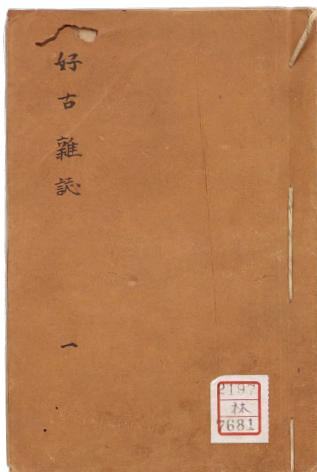
小室家文書 25 明治 12 年 (1879) より

旧幕臣の国学者で、浅草の古物商でもあった畠山如心齋はたけやまじょしんさいから小室元長へ送られた手紙が綴られた書簡集です。当時の好古家たちの交流や、古物のやりとりの様子がうかがえるものです。

やりとりのなかには、古文書の売買の記録も見られ、「六波羅御教書」や「北条氏邦書状」は元長は如心齋から購入していたことがわかります。

## I - 2 好古家たちの交流

好古家たちは書簡のやりとりや研究会などを通じて、独自の「知」のネットワークを形成していました。明治 14 年 (1881) に発足した「好古社」は、全国の好古家たちに各地の好古情報を伝える『好古雑誌』を刊行しています。また小室元長は好古家たちとのやりとりを書簡集としてまとめています。



### こうこざっし 『好古雑誌』

林家文書 7681・7682 明治 15 年 (1882) ~ 明治 16 年

明治 10 年代に全国の好古家たちによって、「好古社」などの会が創立されました。会では機関誌を発行し、全国の好古に関する情報が寄せられました。

『好古雑誌』は好古社によって明治 14 年 (1881) 7 月に刊行が始まりました。初篇第七号には、比企郡黒岩村 (現吉見町) で根岸武香らによって発掘された遺物の発見記 (佐藤弘毅著) が載せられています。



### うちやましゅかん 内山手簡

小室家文書 140 明治 11 年 (1878)

小室元長が、比企郡久米田村 (現吉見町) の好古家内山作信から送られた書簡を綴じたものです。これらの書簡は、内容から元長があえて作信に罫紙で書かせ、後にまとめようとしたものであることがわかります。元長は好古家たちから送られた書簡を書簡集として綴じ込んだものをいくつも作っていて、彼らの書簡を、好古家の間で共有された重要な記録として保存したと考えられます。

### 埼玉の好古家② うちやまなりのぶ 内山作信 ..... (1816 ~ 1887)

比企郡久米田村 (現吉見町) の出身で、村の名主・戸長を務めています。祖先は松山城主上田氏の家臣と伝えられます。幕末期から学問に造詣が深く、とりわけ上田氏や松山城についての研究をしていました。また明治 19 年 (1886) には『埼玉県村名誌』を著しています。なお作信の息子である温載は、明治 12 年 (1879) に県会議員となっています。

## I - 3 地域の歴史を集める

好古家たちが収集の対象としたものは、自身の住む地域に関する歴史史料や、自身の先祖に関する史料など、身近なものにも向けられていました。

入間郡石井村（現坂戸市）の国学者井上淑蔭は、居宅の周辺から出土する考古遺物に関心を寄せ、『石剣考』など、考古学的視点に立った著作を残しました。また、自身の先祖を戦国時代の松山城主上田氏の家臣と位置付ける内山作信は、上田氏や松山城の研究に取り組んでいました。

### 埼玉の好古家③ いのうえよしかげ 井上淑蔭 ..... (1804 ~ 1886)

入間郡石井村（現坂戸市）の出身。歌人であり国学者として知られています。文政3年（1820）に江戸に出て国学者の清水浜臣に師事し、歌集や国学の著作を残しました。淑蔭の関心は国学から地誌、古物学に及び、『各自譚』や『石剣考』といった、考古遺物の考証を行った著作も残しています。

明治2年（1869）7月には明治新政府が設立した大学校の中助教、神祇官史生（史料編纂官）として出仕しましたが、2年で職を辞しました。その後、郷里の石井村で著述に没頭し、明治19年（1886）に83歳で亡くなりました。

淑蔭の著作等は「井上家文書」として当館の収蔵となっています。



### せきけんこう 『石剣考』

井上家文書 126 明治5年(1872) 8月

井上淑蔭の住む石井村隣村の塚越村（現坂戸市）に所在する「石剣」の考察から、各地に残る「石剣」（現在で言うところの「石棒」も含む）について、その用途などの考証を行っています。埼玉県内では、考古学的論説のさきがけとなる著作です。



### かくじたん 『各自譚』初編

井上家文書 751 明治元年(1868)

井上淑蔭が、自身の友人や門弟からの古事・古物の見物報告をまとめた自筆稿本です。地域の話としては、安政6年（1859）に比企郡久米田村（現吉見町）で暴風雨によって崩壊した古墳から発見された刀や轡くわについての考察がみられます。

### まつやまじょうせきりやくこう 『松山城蹟略考』

小室家文書 2892 [明治時代]

内山作信の先祖は、戦国時代に松山城主であった上田氏の家臣と伝えられていました。そのため作信は、松山城に関する研究を進め、松山城の古絵図や上田氏に関する古文書を積極的に収集していました。本資料は作信が松山城に関する研究をまとめた稿本ですが、刊行までには至らなかったようです。



# II 調べる ~ 調査 ~

好古家は、コレクターであることと同時に、古物の研究を行う研究者でもありました。大里郡<sup>かぶとやま</sup>青山村（現熊谷市）の根岸武香は、考古遺物の収集をはじめ、発掘調査を行うなど考古学の研究に大きな足跡を残し、当時の著名な文化人とも交流していました。小室元長は、集めた資料を「叢書」という形にまとめたり、「小田原北条家分限帳」などの書誌学的研究を進めたりしていました。こうした好古家たちの成果は、明治時代の史書復刻事業にも活かされていくことになります。

## II - 1 根岸武香の考古学

大里郡青山村（現熊谷市）の豪農の出身であった根岸武香は、わが国の考古学史でもさきがけとなる人物です。地元の考古遺物の収集を行っていた武香は、日本で最初の近代的発掘調査として知られる明治10年（1877）9月の大森貝塚の発掘調査に触発され、同年11月に吉見丘陵にある黒岩横穴墓群（吉見町）の発掘調査を行っています。その成果は大きな話題となり、武香は大森貝塚を調査したE.S. モースをはじめ、多くの文化人・考古学者とも交流を持ちました。

### 埼玉の好古家④ <sup>ねぎしたけか</sup>根岸武香 ..... (1839 ~ 1902)

大里郡青山村（現熊谷市）の豪農で、江戸幕末期に尊王攘夷運動で新徴組の立ち上げにも関わった根岸友山の二男です。若くして青山村の名主となり、明治期には埼玉県会議員としても活躍、その後貴族院議員にもなりました。

父友山も好古家として知られていましたが、とりわけ武香は考古遺物の収集に力を入れ、明治10年（1877）11月の黒岩横穴墓群（吉見町）の発掘調査も行いました。また明治17年（1884）には江戸幕府の編さんした地誌『新編武蔵風土記稿』の刊行にも携わるなど、武香の好古家としての関心は多岐にわたりました。



根岸武香（国立国会図書館所蔵）

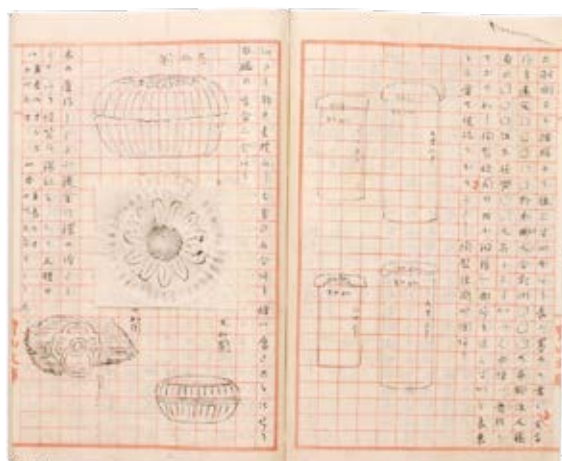


### <sup>ねぎしたけか ついとうぶん</sup>根岸武香追悼文

林家文書 7543-4

明治35年（1902）12月

明治35年に根岸武香が亡くなった際に書かれた追悼文です。寄せたのは樟陰堂仲秋という人物です。武香の事績として、吉見百穴の発掘や『新編武蔵風土記稿』の刊行が挙げられています。



### <sup>の もとむらしつどぶつ み き</sup>「野本村出土物を観る記」

林家文書 7545 明治34年（1901）3月

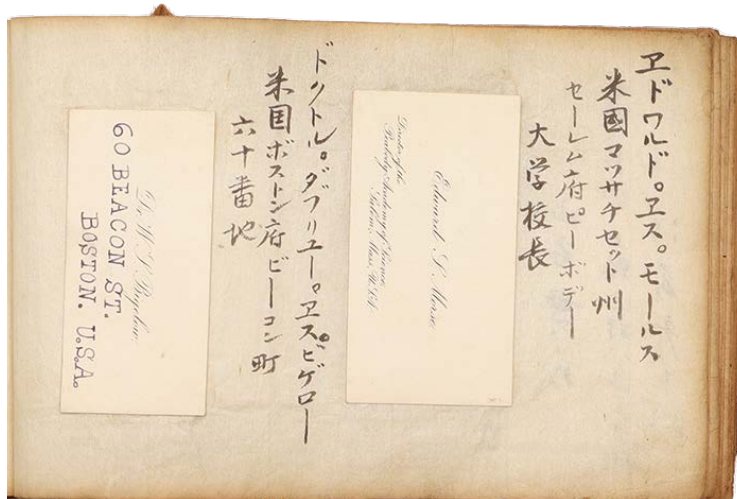
明治34年に、比企郡野本村（現東松山市）の利仁神社<sup>としひと</sup>で、銅の経筒や鏡、短刀が偶然発見されました。それを聞いた根岸武香が、現地に赴きまとめたのが本資料です。出土品の詳細な模写や、拓本が載せられていて、武香の調査能力の高さがうかがえます。本資料は同年に考古学会発行の雑誌『考古界』第1篇第1号で「武蔵大里郡野本村の発見物に就いて」と題して発表されました。



## E.S. モースからの感謝状

根岸家文書 5256 明治 16 年 (1883)

エドワード・S. モースは、明治 10 年 (1877) に来日したアメリカの動物学者で、大森貝塚を発掘するなど、日本の考古学の基礎を作った人物として知られています。この感謝状は、武香がモースへ自身の収集した土器片を送ったことに対し、モースが館長を務める博物館「ピーボディー科学アカデミー」(現ピーボディー・エセックス博物館) から送られたものです。



### 【翻訳文】

ピーボディー科学アカデミー

根岸様

ピーボディー科学アカデミーを代表して、古い陶器の破片をアカデミーに寄贈していただいたことを光栄に思います。

私はアカデミー評議員の指示により、アカデミーの目的を推進するために提供された援助に対し、感謝の意を表します。

このことをあなたに伝えることが出来て光栄です。

エドワード・S. モース

ジョン・ロビンソン 筆

館長

EAST INDIA MARINE HALL

セーラム、マサチューセッツ、

1883 年 10 月 22 日

### じんめいろく 人名録

根岸家文書 1058 [明治時代]

明治 12 年 (1879) 8 月、E.S. モースと日本美術研究者として知られるビゲローが胃山村 (現熊谷市) の根岸家を訪れました。この人名録には、その時に武香が交わしたモースやビゲローの名刺も貼付されています。



### まつうらたけしろうしょかん 松浦武四郎書簡

根岸家文書 5057 [明治 9 年 (1876)]8 月 21 日

松浦武四郎は江戸時代末から明治時代にかけて活躍した探検家で、北海道の名付け親としても知られています。好古家として古物への関心も高かった武四郎と根岸武香は知己の間柄でした。書簡には、彼らが共通に関心を持っていた「古金銀」の情報をはじめ、武四郎が武香から送られた土偶をたいへん誇らしげにしていたことがわかります。

### せんしゅうにつき 千秋日記

林家文書 7537 明治 9 年 (1876)

明治 9 年に記された根岸武香の日記です。1 月 4 日に比企郡大谷村 (現東松山市) から「土偶人」が発見され、武香が入手しました。1 月 8 日条には「松浦へ書状ヲ出ス」とあり、その後 1 月 16 日には松浦へ土偶を送っていることが見られます。





## II - 2 小室元長の歴史研究

小室元長は、好古家として古文書などの収集・書写をしつつ、歴史研究にも力を入れていました。元長は集めた古文書の写しや、同時代の記録類を『**窺天録**』や『**工村々舎叢書**』という名前を付けてまとめていました。

また、元長は戦国大名北条氏に関する史料である「小田原北条氏所領役帳」の研究にも打ち込み、多くの写本を集めて、それらを校合した書物の編さんも行いました。



### こむろけぞうしよもくろく 小室家蔵書目録

小室家文書 195 [明治時代]

医家であった小室家には、医学に関する書物をはじめ、『伊勢物語』などの国文学や、『群書類従』などの歴史に関する編さん物や、『工村々舎叢書』など元長自身がまとめた書物がありました。



### きてんろく 『窺天録』

小室家文書 2944 [明治時代]

『窺天録』は、小室元長が集めた様々な情報をまとめ、作成したものの一つです。全20冊に及ぶので、鎌倉時代の記録から明治期の布達や廻状の類までが写されています。

写真は鎌倉幕府が治安維持を命じた記録の写しです。



### こうそんそんしゃそうしよ 『工村々舎叢書』

小室家文書 2987 [明治時代]

『工村々舎叢書』は、小室元長が収集した史料をまとめたもの一つで、9冊に及ぶ書物です。古文書や系図、古碑の写しなど、幅広い史料が写されています。

写真は、元長と親しくしていた好古家内山作信の家に伝わった「内山氏古文書」の写しです。現在のところ、内山氏古文書の原本は確認されていないため、その存在を今に伝える重要な写しとなっています。

## ～小田原北条氏所領役帳～

小田原城（神奈川県小田原市）を本拠地とした戦国大名北条氏の三代北条氏康が、家臣らの所領について、知行高と郷村名を記録し、知行役の賦課状況を把握したものです。「小田原衆所領役帳」「北条氏（家）分限帳」などとも呼ばれています。もともとの原本は高野山高室院にありました。この原本は焼失して現存しませんが、多くの写本が残されています。写本によって異同もみられ、それらを校合した書誌学的研究も進められています。



### 『北条分限帳』（底本：早雲寺本）

小室家文書 2527 明治 8 年 (1875) 5 月

小室家に残される小田原北条氏所領役帳の写本のうちの一つです。奥書を見ると、小室元長が早雲寺（神奈川県箱根町）を訪れた際に書写したものであることがわかります。

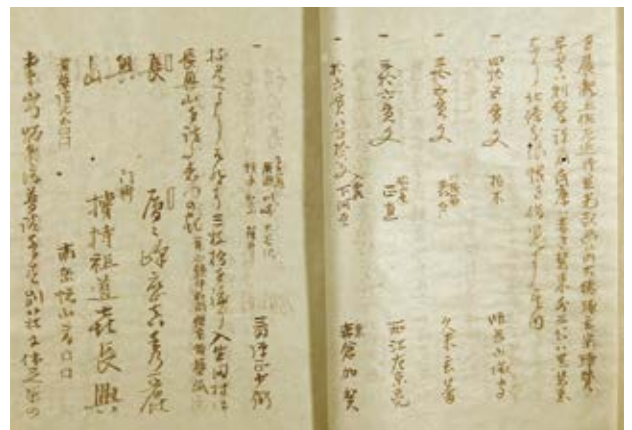


【読み下し】  
 右北条家分限帳一巻者、拙寺  
 旧年之秘蔵タリ、這般武蔵国  
 比企郡番匠村住小室元長翁  
 来訪之節、書写セラレタル處也  
 仍テ一言ヲ附シテ証トス  
 相模国足柄下郡  
 湯本村  
 早雲寺住  
 明治八年五月十二日 北條乾谷

### 「熱海再遊簿」

小室家文書 271-2 明治 8 年 (1875)

小室元長は、明治 7 年 (1874) と 8 年 (1875)、9 年 (1876) に熱海に旅をし、その記録を残しています。本資料は明治 8 年の旅の記録です。5 月に早雲寺を訪れた元長が、早雲寺が所蔵する「北条分限帳」を筆写している記事がみられます。

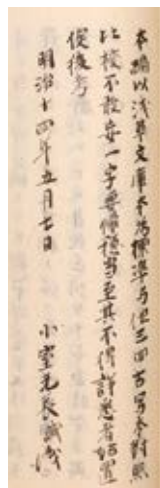


### 『校正 小田原北条家分限帳』

小室家文書 2531 明治 18 年 (1885) 7 月

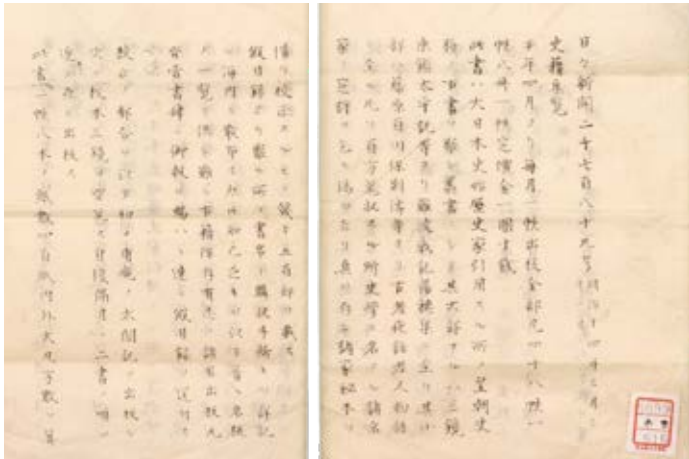
小室元長が、浅草文庫本（現内閣文庫本）を底本として、その他早雲寺本や高野山高室院写本などの、諸写本と対照して校合した所領役帳です。奥書には、元長が所領役帳の校訂を志した経緯などが記されており、元長の所領役帳研究の集大成とも言えるものです。

なお元長は、本書が成ったこの年の 12 月に没しています。



## II - 3 好古家と史書の刊行

古代以来、多くの史書が著されてきました。18世紀後半に塙保己一が編んだ『群書類従』は、それらをまとめた大きな業績でした。明治時代になっても、引き続き史書を刊行しようとする動きがあらわれます。儒学者近藤瓶城こんどうへいじょうは、『群書類従』には収録されなかった書籍の集成を目指し、『史籍集覧』の刊行を開始します。その中には、小室元長による『鎌倉大草紙』の校訂本も収録されました。また根岸武香は、近藤と共に、江戸時代に編さんされた地誌である『新編武蔵風土記稿』を出版することに携わりました。



### し せきしゅうらんしゅうばんこうこく 史籍集覧出版広告

小室家文書 816 明治 14 年 (1881) 3 月

『史籍集覧』は、儒学者近藤瓶城が編さんして刊行された、主に中近世の記録史料がまとめられた史料集です。明治 14 年 (1881) から同 18 年 (1885) にかけて、和装本 364 部 467 冊、総目解題 1 冊が刊行されました。この出版広告には史籍集覧の刊行が告知されるとともに、予約を募集しています。これは今日の予約募集による限定出版のさきがけとなりました。

### こうほん かまくらおおぞうし 『校本 鎌倉大草紙』(史籍集覧)

小室家文書 3153・3154

明治 16 年 (1883) 4 月 20 日

『史籍集覧』に収録された『鎌倉大草紙』は、小室元長が諸本を校訂したものを基にしています。元長の詳細な校訂により、上・中・下巻本として群書類従本(上・下巻本)を補う校本となりました。そのことを近藤瓶城は「今校本成テ始テ連壁世二出ルヲ知ル、小室氏ノ功豈偉ナラスヤ」と記しています。



### — 「鎌倉大草紙」について —

「鎌倉大草紙」は、南北朝時代から戦国時代にかけての関東地方の政治情勢を記した軍記です。『群書類従』では上・下の二巻本として知られていましたが、『史籍集覧』では上・中・下の三巻本が全本として紹介されました。ただし、その後の研究によって、現在では二巻本のほうが元々の状態に近いものと考えられています。



### しんべんむさしのくにふどき 『新編武蔵国風土記』巻之 174 入間郡 19 越生郷(写)

小室家文書 2902 [書写: 明治時代]

『新編武蔵国風土記』は、江戸幕府が文化 7 年 (1810) から天保元年 (1830) にかけて編さんした武蔵国内の地誌です。全 265 巻・附録 1 巻で、各郡村の地理・歴史などがまとめられています。

明治 12 年頃 (1879) から、小室元長は、平村(現ときがわ町)の峯岸重行とともに全巻の写本作成計画を進め、各地に残る写本を借り受け、筆写を進めました。

同時期に根岸武香は、儒学者近藤瓶城とともに出版の計画を立てていました。武香の精力的な活動もあり『新編武蔵風土記稿』として明治 17 年 (1884) 6 月、内務省地理局版の出版が開始され、同 20 年 (1887) に全 80 冊の配本を終えました。

## コラム 武蔵武士「畠山重忠」と好古家

平安時代より武蔵国には多くの武士が存在し、のちに秩父氏・畠山氏・河越氏・武蔵七党などの武士団が形成されました。鎌倉時代、武蔵国の武士団は御家人として幕府を支える存在でもありました。その中で武蔵国男衾郡畠山荘（現深谷市）を本拠とした畠山重忠は、源平合戦や奥州藤原氏征討などの際に数々の功績を挙げました。鎌倉時代に成立した歴史書『吾妻鏡』には、重忠の美談が数々記載されており、源頼朝の信頼も厚く、模範的な鎌倉武士と見られていました。

江戸時代になると重忠は忠義を尽くす武士として歌舞伎や錦絵に登場し、その名が広まりました。明治時代には、畠山重忠の後裔を自負する旧幕臣の畠山如心斎を中心に、重忠の供養塔を修復する事業が開始されました。県内の好古家もこれに呼応したことをきっかけに、郷土の武士である重忠に対する注目が集まりました。



### 拓本「<sup>しゅうけんはたけやましげただこうだん び き</sup>修建畠山重忠公断碑記」

小室家文書 6455 明治 12 年 (1879) 10 月

畠山重忠の供養塔と伝承されてきた慈光寺（現ときがわ町）の板碑の修復記念に建てられた顕彰碑の拓本です。板碑の修復事業は、明治 11 年 (1878) に開始され、翌年に完了しました。畠山如心斎を中心に、県内の好古家の峯岸重行や小室元長などが携ったことが銘文に刻まれています。

### はたけやましげただじょうせきの ずうし 畠山重忠城跡之図写

小室家文書 737

明治 12 年 (1879) 3 月

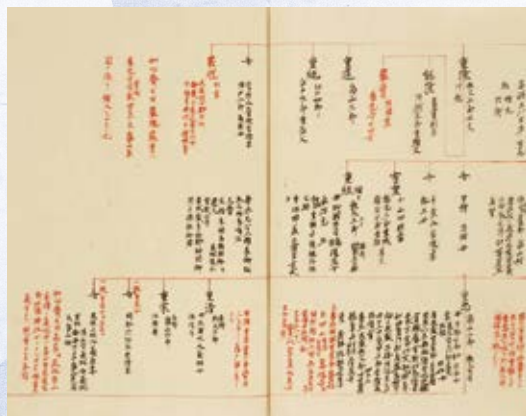
比企郡菅谷村（現嵐山町）戸長根岸与兵衛が作成した菅谷館跡の絵図です。菅谷館は畠山重忠の居館と伝えられています。



### こうそんそんしゃそうしよ 『工村々舎叢書』

小室家文書 2986 【明治時代】

『工村々舎叢書』のなかに記された畠山重忠に関する記録です。右写真は重忠のものと伝承される板碑を模写したもので、重忠の死後から 57 年後の弘長 2 年 (1262) に作られたことが銘文に記されています。この板碑は明治年間に畠山如心斎らによって修復され、現在、慈光寺に安置されています。左写真は畠山如心斎によって校訂された畠山氏系図です。



# III 伝える～伝来～

好古家たちが心血を注ぎ、集められてきた資料は、散逸・破壊等の多くの危機を乗り越えて現在に伝わったものです。根岸武香は、自身が発掘に携わった吉見百穴の保存に力を尽くし、史跡保存への道を開きました。

また、好古家たちの集めた資料の一部は、明治時代以降になって誕生した博物館などの施設に収蔵され、保存されていくこととなりました。

## III-1 古物・史跡保存への道

明治時代になると、古物に対する考え方が大きく転換していくことになります。文明開化の風潮と神仏分離政策の中、起こった廃仏毀釈の運動によって、仏具等の破壊・流出が起こったり、出土した考古遺物を祀り上げる「迷信」を打破するために遺物が破壊されたりすることもありました。

こうした流れの一方、明治政府は「古器旧物」を保存していく方向性を打ち出します。また好古が「古物学」という学問となり、海外から「博物館」の概念が導入されたことで、やがて古物が「文化財」として保存される契機になりました。



こ き きゅうぶつ の たぐいかきあげさしだし つき だ じょうかんたっしかいじょう  
古器旧物之類書上差出ニ付太政官達廻状

大熊(正)家文書 1849 [明治4年(1871)]

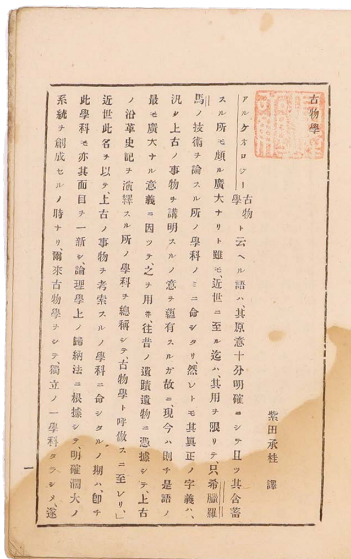
明治4年(1871)5月、明治政府は古い祭器や宝玉をはじめ、古文書や諸道具に至る「古器旧物」を保存するように布告しました。これを受けて、各地で地域に伝わる古器旧物の調査が行われています。調査された古器旧物は、その後、博覧会や博物館に集められることにもなります。古物が「文化財」として保存されていく第一歩とも言えます。



ふくざわ ゆきち せいやう じじょう しよへん  
福沢諭吉『西洋事情』初編(卷之一)

小林(正)家文書 2199 明治3年(1870)

初刷は慶応2年(1866)です。本書では欧米の政治・経済・学校・技術などが紹介され、その中で「博物館」が項目として立てられて紹介されています。「博物館ハ世界中ノ物産古物珍物ヲ集メテ人ニ示シ、見聞ヲ博クスル為メニ設ルモノナリ」とまとめられています。日本人が博物館という存在に触れた最初期の書物と言えます。



ひゃっ か ぜんしよ こぶつがく  
百科全書『古物学』

新井(侖)家文書 25929 明治10年(1877)

『百科全書』シリーズは、明治6年(1873)から文部省が刊行を開始したもので、人々の啓蒙を目的とした翻訳書です。『古物学』は明治10年(1877)に刊行されました。原題は「アルケオロジー (Archeology)」です。「アルケオロジー」は現在では「考古学」と訳されます。本書は学問としての古物研究を説いた最初の書物とされています。

よしみひやくあな  
 ~吉見百穴の発掘・保存~

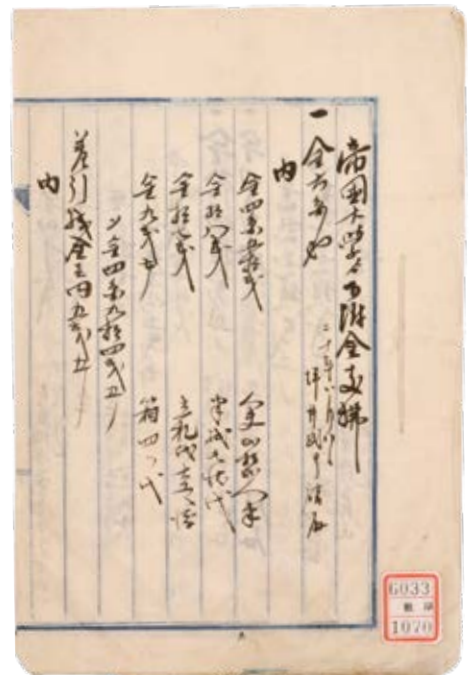
吉見百穴は、比企郡吉見町にある、大正12年(1923)に国指定史跡となった横穴墓群です。その存在は江戸時代から知られていましたが、明治20年(1887)に東京帝国大学(現東京大学)の学生であった坪井正五郎を中心に、土地の地主の根岸武香と北吉見村(現吉見町)の大沢藤助、東京帝国大学の援助を得て全面的な発掘が行われました。調査の後、根岸武香らは吉見百穴を史跡として保存していくために尽力し、自力で事務所を建設し、維持管理をしていきました。



むさしのくによこみぐんきたよしみ さと ふるあな み き  
 「武蔵国横見郡北吉見の里なる古穴を見る記」

井上家文書 74 [明治21年(1888)か]

吉見百穴の発掘は、好古家たちが注目するところとなり、多くの見学者が訪れました。この記録は、井上淑蔭が百穴を訪れ、記したものとされています。百穴の様子を詳しく観察して記録した好古家らしい文章と言えます。



ていこくだいがく か ふ きん し はらい よしみひやくあなはくつ  
 帝国大学より下附金支払 (吉見百穴発掘)

根岸家文書 1070 明治20年(1887)8月

吉見百穴の発掘調査は、事前の調査の結果、予想を超える横穴が存在することが明らかになり、多額の費用がかかる見込みになりました。発掘の中心にいた東京帝国大学の学生坪井正五郎は、大学に掛け合って援助を受けることになりました。本資料はその時に下付された資金の支払簿で、下付金は発掘の人夫費用などに宛てられていたことがわかります。



いけんじょうしんしょ ひやくあなほぞん つき  
 意見上申書 (百穴保存二付)

根岸家文書 3532 明治21年(1888)5月

吉見百穴の土地の地主だった根岸武香と北吉見村(現吉見町)の大沢藤助の連名で、宮内省に提出した百穴保存の上申書の控です。百穴の調査に多くの人々の耳目が集まったことを述べ、このまま放置すれば荒れ果ててしまうため、「献納」すなわち公有地化して管理していくことを願っています。しかし、この上申は受け入れられず、この後武香は自力で事務所を建設して管理していくことになりました。

吉見百穴が国指定史跡となったのは、大正12年(1923)のことです。



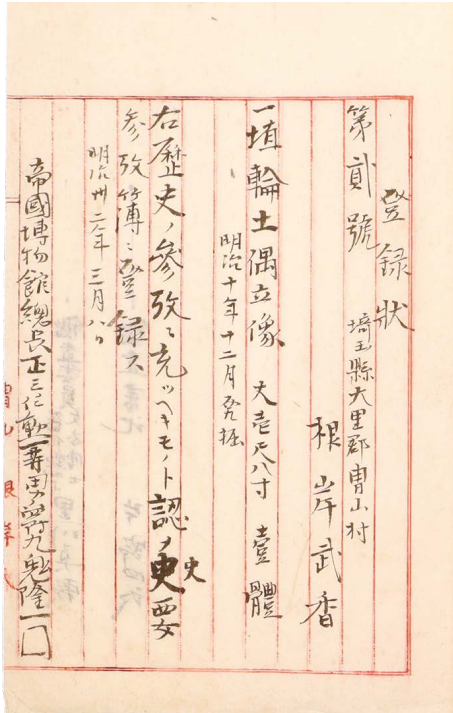
えはがき よしみひやくあな  
 絵葉書「吉見百穴」

岸田氏収集文書 7304 年代未詳

## III - 2 好古家と博物館

根岸武香は、自身が収集した考古遺物を自邸に作った展示室「<sup>しゅうこしゃ</sup>菟古舎」に展示し、訪れる人々に公開していました。菟古舎は埼玉県内における博物館的な施設として最も古いものと言われています。

また、武香の所有していた古物は、自身やその子孫によって帝国博物館（現東京国立博物館）に寄贈されていきました。こうした好古家の努力によって、古物は現代に伝えられました。



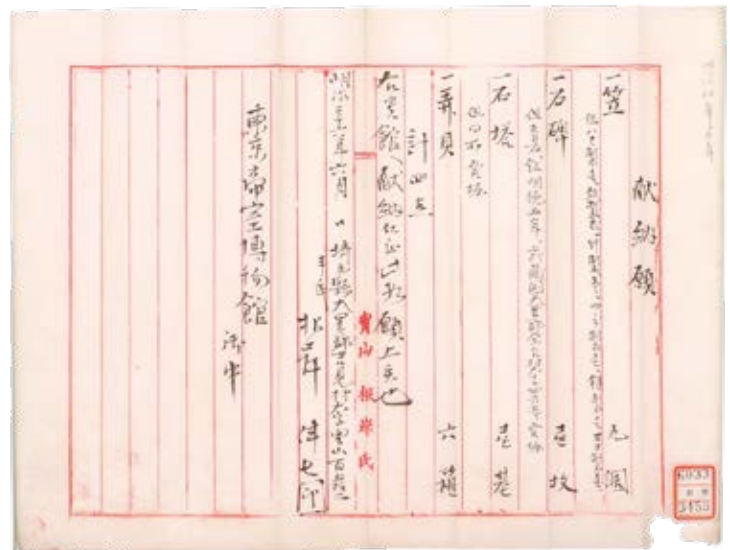
### ていこくはくぶつかんかんさじょう 帝国博物館鑑査状（写）

林家文書 7543-2 明治 32 年 (1899) 3 月 8 日

根岸武香が収集した考古遺物之内、歴史的に重要なものは、明治 22 年 (1889) に設置された帝国博物館（現東京国立博物館）にも納められました。本資料には博物館が武香所有の土偶を歴史的に重要なものとして認定し、登録した登録状の写しが載せられています。なお、この時に登録された「埴輪土偶立像」は、現在も東京国立博物館の所蔵品（重要文化財「武装男子埴輪」）として残されています。



重要文化財  
「武装男子埴輪」  
(東京国立博物館所蔵)



### けんのうねがい 献納願（写）

根岸家文書 3458 明治 36 年 (1903) 6 月

根岸伴七（盾臣、武香の子息、武香は前年に死去）が、東京帝室博物館（帝国博物館の改称、現東京国立博物館）へ、笠 9 個、石碑（板碑）1 枚、石塔 1 基、弄具（おもちゃ、詳細不明）6 箱を献納することを願い出たものです。このうち石碑と石塔は大里郡奈良村（現熊谷市）の四方寺から出土したものと書かれています。

## エピソード 好古家たちの想いを活かす

好古家たちの収集活動に見られるように、今に伝わる資料は、いくつもの経緯を経て、大切に伝えられてきたものです。そこには伝えてきた人々の想いが込められています。

今回の企画展では、埼玉の好古家たちが高い志と大いなる熱意と行動により、「集め」、「調べ」、「伝え」てきた一端を御紹介しました。

好古家たちは、そこまでしてどうしてこれらの行動に没頭していったのか。「古物」から発せられるメッセージにその動機を見出せましたでしょうか。

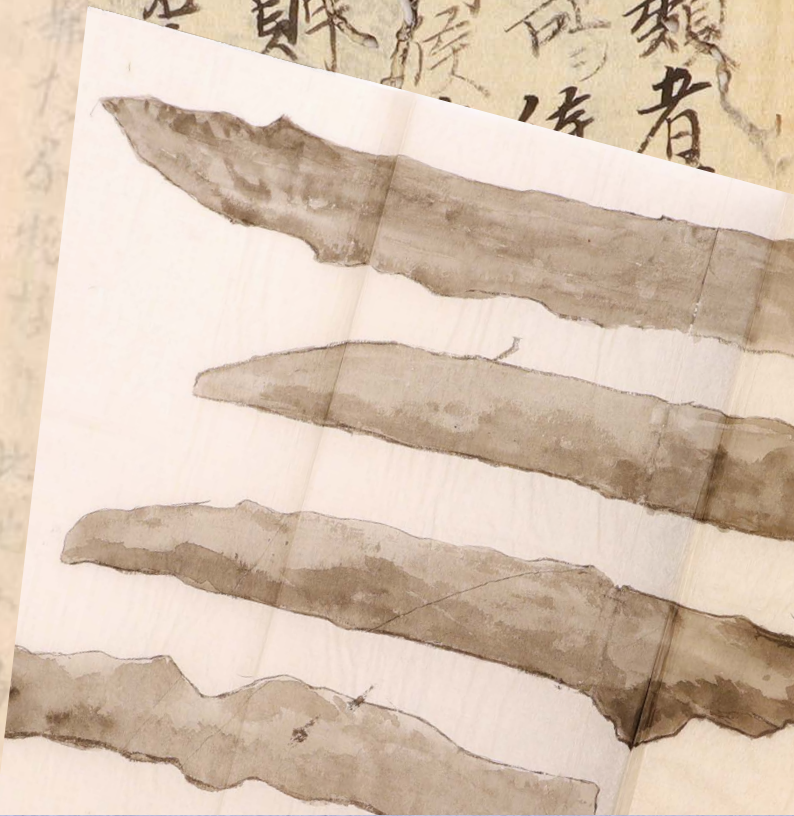
私たちは、好古家たちの事績に感謝しつつ、次世代にその想いを活かせるよう、「大事にしたいこと」、「大切にしたいこと」、そして「守っていききたいこと」とは何かを問い続けていきます。



『埼玉県史料叢書』1～23 巻



古器舊物之類者  
風俗之草考証  
然い故舊競新  
後而心曆世  
品目并所藏人名



**表紙写真**

太政官牒（小室家文書 5695）『石剣考』（井上家文書 126）  
松山城蹟図（写）（小室家文書 740）

**裏表紙写真**

『石剣考』（井上家文書 126） [野本村出土物を観る記]（林家文書 7545）  
[古器旧物之類書上差出二付太政官達廻状]（大熊（正）家文書 1849）  
『好古雑誌』（林家文書 7681）



埼玉県立文書館マスコット  
もんじろう

埼玉県立文書館 令和3年度企画展

「古物を伝える—好古家たちの埼玉—」

編集・発行 埼玉県立文書館 さいたま市浦和区高砂4-3-18

発行日 令和3年12月14日

印刷・製本 (有) マックス・アーリー

